

今年度、パイロット教員に任命され、これまで実践されていない新しいスタイルの授業実践の公開授業をすることになり、どのような授業を展開すればいいか、とても悩んだ。

「主体的・対話的で深い学び」がテーマであったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、グループワークは取り入れることができない。そこで、今回は「主体的・対話的」を取り入れつつ、「深い学び」を重視した授業を展開することにした。一番悩んだのは、どのようにして深い学びに結び付けるかということであった。

公開授業は、経営情報科2年生（習熟度別クラス13名）で、財務会計Ⅰ「固定負債」の単元で行った。これまで、財務会計Ⅰの「主体的・対話的で深い学び」の授業実践は、「財務諸表分析」の単元が多く取り扱われており、この単元でどのような授業構成にすればいいか、試行錯誤した。グループワークはできないので、普段と同様、まず自分で考え、その後、ペアで確認させるというペアワークを取り入れた。ペアの意見が異なるときは、相手を納得させる説明をするように促すことで、「アウトプットを前提とした、インプット」を実現することができ、「思考をアクティブ」にすることができたのではないかと思う。同時に、発問を多く取り入れることで、生徒がこれまで学んできた知識を活かして自ら考える機会を多く作るよう心掛けた。そのために、授業プリントに沿ったスライドを作成し、あらかじめ、いつ、どのような発問をするのかを準備して授業に臨んだ。はじめは、簡単な発問から、徐々に発問のレベルを上げていった。発問に答えることができなかった場合は、ヒントを与えるなど、できるだけ答えを生徒から引き出すように心がけた。私たち教員は、授業の進度を優先してしまい、発問しておきながら、生徒が答えられなかった場合、すぐに答えを言うことが多いように感じる。生徒が答えられなかった場合、こちらがぐっと我慢し、様々なヒントを与えることで、生徒の口から答えを引き出すことができれば、生徒は達成感を味わうことができ、また、自分で答えを導き出すことの面白さに気づき、その後の学びが変わっていくのではないだろうか。一番レベルの高い最後の発問では、最終的に生徒から答えを引き出すことはできなかったが、生徒は、発問されたことについて色々考えることで、深い学びにつながったのではないかと思う。

公開授業の研究協議では、「授業のテンポがよかった」、「発問が多く、生徒がよく考えていた」、「解法だけでなく、意味を考えさせる授業だった」など、多くの先生からお褒めの言葉をいただき、大変感謝している。いただいた意見の中で改善したほうがいいという意見は、「教材提示装置を使うときは、太めのペンを使うと後ろまで見やすくなる」、「教科書の資料をうまく活用したほうがいい」、「今回は理論だったが、販売実習などの実務と関連付けて理解させた方がいい」などである。また、身の周りのもの（こと）を授業のネタにするという意見もいただいた。商業の見方・考え方については、意外と身の周りに多くあるということで、生徒に商業の各科目について興味を持たせるために、授業に取り入れられるものがないか、常にアンテナを高くしておく必要があると実感した。今回の研究協議でいただいた意見は、今後の授業に取り入れていきたいと考えている。

今回、パイロット教員として、じっくりと授業研究をする機会をいただき、多くのことを学ぶことができた。今後も、より良い授業を行うために日々自己研鑽に励んでいきたい。